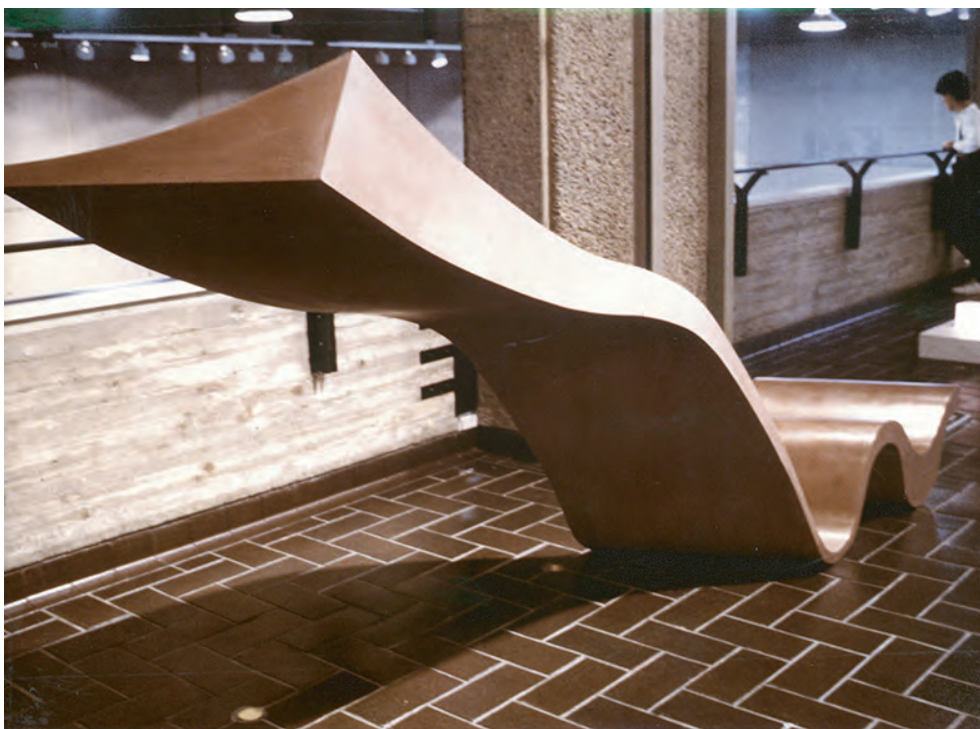


『私を創ってくれた3つの作品』

スペースデザイン部会員 金子 武志

<作品1>



『風来坊』 第48回新制作展（1984年） W3000×D900×H1500
素材と技法：エポキシ樹脂と金属粉によるFRP工法



1/10スケールモデル（素材と技法：エポキシ樹脂と金属粉によるFRP工法）

私が現在続けてこられているのはこの作品があったからだと思います。

師事していた当時 SD 部会員の小野襄氏が主宰する造形研究室で材料調合や造形技法を学びながら何とか出品していた頃、4回目の出品でまだ20代半ばです。前年の新制作展では落選してしまい、色々とうまくいかないことも多く、もう制作をやめてしまおうとも考えていた年でしたが、結婚し子供も生まれたこともあり、何でもいからとりあえず思い切りデカくてバカげたものを

作りたかった記憶があります。

縮尺モデルを作って先生や先輩にも指導してもらえるよう工夫もしました。サイズを色々検討したのですが結果としてモデルの倍率設定を謝り、本来は 1/8 にすべきところを、欲を出して 1/10 設定にしてしまいました。ただただ大きくしたかった、若い時期にありがちなパターンです。経験不足のため、スケールが少し上がるだけで手間は大きく跳ね上がることが全く分かっていません。当時の年齢だから何とか作れましたが。

この作品にはこんなエピソードがあります。

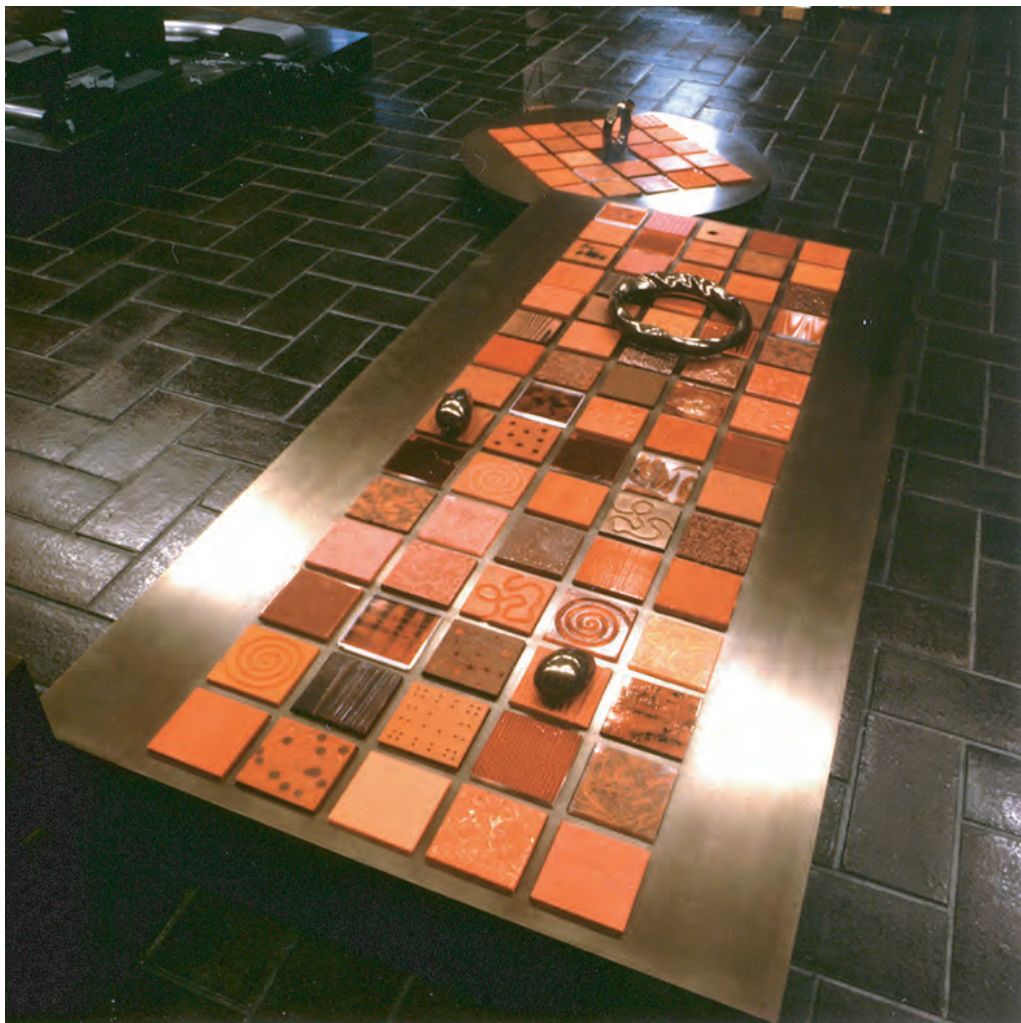
制作の終盤、何とか全ての型を外してほっと一息。手伝いの学生スタッフと夕食に出かけて戻ってきたら大仰天。離型のタイミングが早すぎて作品は無残にも倒れてしまいました。樹脂素材は硬化しているようでも完全に固まるには養生の時間が必要なのに読みが甘かったです。徹夜で大補修をして何とかギリギリ搬入までには間に合いました。

何とか入選は果たしたものの、オーバースケールで突拍子もない問題作は、皆から面白がられはしましたが評価はイマイチ。そんな展覧会のある日、新制作創設会員の猪熊弦一郎先生が奥様と一緒に SD 会場に見学に来られた際、何と私が呼ばれあれこれ質問を受けるという機会がありました。

「とてもユニークな造形だけど、どうやって作ったの？材料は何？」と聞かれ「樹脂を使いました」と答えると「僕もプラスチック（アクリル絵具のこと？）で絵を描いてるよ、今度僕のアトリエに来て作り方を教えて下さいね」と…。私みたいな若輩になんて優しい言葉を掛けて下さるのか。本当に嬉しく嬉しくて…。

作品は人によって見方も自由、感じ方も様々なのだ、ということも教わった気がします。制作を続ける原動力になった大事な出来事でした。

<作品2>



『触覚と赤 - 100 の記憶』 第 62 回新制作展（1998 年） W3600 × D1800 × H1200
素材：エポキシ樹脂、金属粉（ブロンズ粉他）、木材各種、色材（顔料、染料、着色剤）



PROCESS

A	ベースの材	B	下地の加工	C	色(塗料)	D	着色加工方法	E	仕上がり状態
1	石 黒	1	解地・粗加工	1	アクリル絵の具	1	塗る ① 黒色、黒	1	糊糊 ツヤ消し
2	木 (シナベニヤ)	2	盛り上げる	2	アクリルガッシュ	2	塗る ② ローラー	2	磨き ツヤ消し
3	木 (杉)	3	傷をつける	3	インク	3	塗る ③ スプレー	3	そのまま ツヤ消し
4	木	4	叩く	4	色鉛筆、パステル	4	塗る ④ その他 筆、ナイフ	4	その他 ツヤ消し
5	木(その他)	5	彫る	5	マジック、マーカー	5	塗る ⑤ パステル、色鉛筆		
6	樹脂 (エポキシ系)	6	穴をあける	6	カウスプレー	6	磨る (フタペーパーなど)	6	糊糊 ツヤ消し
7	樹脂 (アクリル系)	7	嵌めて取り出す	7	オイルステイン	7	磨き取る (コーキングなど)	7	磨き ツヤ消し
8	その他	8	貼る(布など)	8	漆・カシュー	8	拭き取る (シンナー、シンナーフリーなど)	8	そのまま ツヤ消し
		9	型(黒色)	9	糊糊	9	磨ける (シンナー、シンナーフリーなど)	9	その他 ツヤ消し
		10	型(黒色4種)	10	その他	10	落とす (シンナーなど)		
				11	顔料 + 生石灰クリーム				
				12	顔料 + 土 + 牧草種 + 砂 + 糞				
				13	顔料 + アクリルメタリック				
				14	顔料 + エポキシ樹脂				
				15	顔料 + エポキシ樹脂				
				16	顔料 + 糊糊 + エポキシ樹脂				

触覚と赤 - 100の記憶

制作協力: ワークショップ1998 (日本デザイン専門学校 インテリアデザイン科 造形デザインゼミナール)
 岡澤太夫真・小池勇樹・藤原加代・尾藤綾子・今野裕子・村松敬子・植松雅人・香田英富・佐藤宏司

『触覚と赤 - 100の記憶』 第62回新制作展 (1998年)
 制作プログラム表 (立体作品と合わせて展示)

職場であるデザイン専門学校の工房を利用している私は、学生達と一緒に制作する機会も多くありました。私も学生時代には新制作展を目指す先輩達の制作を手伝い、美術館への搬入にも同行させてもらった刺激的な思い出があったので、そのような経験を彼らと共有したいという気持ちが常にありました。

それまで授業の延長と称して(笑)学生に制作を手伝ってもらうことは多々ありましたが、何かもっと同じ目線で一緒に作品を創るという意識を持ちたかった気がします。スペースデザイン部では「協同制作」を認めているので何回かグループでの制作を試みましたが、それとはまた少しことなる感覚です。単なる手伝いではなく、一つのテーマを巡って一緒に作り、それぞれの想いや表現が集められて作品になる、そのような方法を模索してみました。当時少しずつ登場し始めた「ワークショップ」というスタイルに着目し、自分のゼミ生や仲間呼びかけ、経験を共有するものづくりを展開してみました。この作品では制作プログラムも皆で考え、記号対応させることで制作をプロセス化し簡単に伝達・共有することを意図しました。造形の授業の延長のようなや教育的な側面が感じられます。(画像参照)

テーマの「赤」は、テキスタイル作品には多く見かける色なのに、男性が比較的多い立体部門ではあまり使われない傾向があったので、色でドッキリさせたくて選んだテーマです。また「触覚」というキーワードは、実際に手で触ってもらうことを目指しました。「様々な赤の、様々な感触に実際に触れてみる」というコンセプトです。これまで何回も触ることができる作品を制作しましたが、美術館の発表では中々難しいこともあります。子ども達は喜んで触りますが、壊れされたり、勢い他の作品も触ってしまいクレームも出ました。現在スペースデザイン部では触ったり、座ったり、動かしたりすることを許可する作家も増え、SD 部の特徴の一つとして捉えていただけるようになりました。

<作品3>



『A ⇄ Z (Password, please!』 第 79 回新制作展 (2015 年) W270~ ×D270~ ×H30